

文明が来た道

『アラジンと魔法のランプ』の世界から考える

突然ですが、アラジンってどこに住んでいた人が知っていますか？『アラジンと魔法のランプ』のアラジンです。小説の挿絵やディズニー映画でのアラジンの外見は、ターバンをかぶったアラブ風の青年です。そのため中東が舞台と思われがちです。しかし、みなさんに馴染み深い青い鳥文庫の『アラジンと魔法のランプ』を読んでもみると、舞台は中国の長安（現在の陝西省西安市）と書かれています。意外なことに中国が舞台なのです。しかし、アラジンという名前は中東風です。正確には「アッラーツ・ディーン」と発音します。「アッラーツ」はアラビア語で神様のことで、これはイスラム教を信仰する人の名前です。昔の中国に、アラジンのようなイスラム教徒が暮らしていた。この背景には、壮大な道の存在があります。

『アラジンと魔法のランプ』はおとぎ話ですから、いつの時代のことなのか、正確なことは分かりません。しかし、長安に都が置かれ、たくさんのイスラム教徒が中国で暮らしていた時代があります。それは、唐の時代（西暦 618～907 年）です。遣唐使としてたくさんの留学生が派遣されたことから、日本人にとっても馴染み深い時代と言えます。

唐の都、長安は当時世界最大の都市でした。碁盤の目状に区切られた町には 100 万人を超える人が暮らしていたそうです。注目すべきなのは、暮らしていた人々の多様性です。『中国文明史⑥隋唐 開かれた文明』によると、中国人以外に、チベットやモンゴル、ペルシア、アラブ、アフリカ出身の人にいたるまで、実に様々な人が暮らしていたそうです。彼らの多くは商人として長安にやって来て、しばらく商売をして故郷へ帰る人もいれば、そのまま長安に住む人もいました。まさに国際都市と言える町だったのです。

石田幹之助の『長安の春』には、長安の町の様子が描かれています。町では外国の音楽や踊りが演じられ、ファッションや女性のメイク、ヘアスタイルはイラン風が流行していたそうです。また、酒場には青い眼をしたイラン人の女性（「胡姫」と呼ばれた。「胡」は広くペルシアやアラブ、インド、アフリカのことを指す）がいて、人気を集めたそうです。漢文の授業でお馴染みの詩人・李白（西暦 701～762 年）は、長安に暮らしていた時期があり、

五陵年少金市東 【五陵の年少 金市の東（若者たちが 長安の東にある繁華街に行く）】

銀鞍白馬渡春風 【銀鞍の白馬 春風を渡る（銀の鞍を付けた白馬に乗って 春風を渡る）】

落花踏尽遊何処 【落花踏み尽くし 何れの処にか遊ぶ（落ちた花びらを踏みながら 一体どこへ行くのだろうか）】

笑入胡姬酒肆中 【笑いて入るは 胡姫の酒肆の中（笑いながら入るのは 胡姫がいる酒場だ）】

という詩を詠んでいます。町の華やかな雰囲気が伝わってきます。この華やかさを作っていたのは、広い世界とつながる道の存在です。当時、多くの商人たちが行き来した道がありました。「シルクロード」という言葉は有名ですね。これは、19 世紀に中国で調査を行ったドイツの地理学者リヒトホーフェン（西暦 1833～1905 年）が用いた「ザイデンシュトラッセ（絹の道）」を英訳した言葉です。中国産の生糸とそれから作られる絹が、古くから重要な交易品とされたことから、この言葉が生まれました。

アラジンの敵役として登場する魔法使いは、北アフリカのモロッコからやって来ます。魔法使いが物語の中で、キャラバン（ラクダを連ねた隊商）に加わって、インドやペルシア、イラクのバグダッドなどをめぐったとアラジンに語る場面がありますが、これは多くの商人が行き来したシルクロードそのものと言えます。『アラジンと魔法のランプ』は、世界をつないだ道、「シルクロード」を背景として生まれた物語です。壮大な道の歴史に思いを馳せながら読むと、また違った面白さが見えてくるかもしれません。

関連する本の紹介

『新編アラビアンナイト アラジンと魔法のランプ』川真田純子（訳）天野喜孝（絵）青い鳥文庫 2002 年

『アラビアンナイト別巻 アラジンとアリババ』前嶋信次（訳）東洋文庫 1985 年

『長安の春』石田幹之助（著）東洋文庫 1967 年

『中国文明史⑥隋唐 開かれた文明』稲畑耕一郎（監修）尹夏清（著）佐藤浩一（訳）創元社 2006 年